

故 和田年史主任研究員と共同で実施した「ひとはくサマースクール」

榎谷 英樹（兵庫県立大学客員研究員）

はじめに

昨年11月、和田年史主任研究員が40歳そこそこの若さで急逝された。

筆者が和田年史主任研究員（以後、和田先生）と初めて出会ったのは、今から3年前、熊谷哲兵庫県立大学教授（現名誉教授）が主宰する「はりま里山研究所」で行われた「サイエンスカフェ」であった。このときに「ひとはく」に海洋生物の専門家がいることを初めて知った。筆者は以前、兵庫県立いえしま自然体験センター（以後、「いえしま」）の主任専門指導員として、公募で集まった小学校5・6年児童を対象に、自然を五感で感じた上で研究対象となる海洋生物を自ら決定し、必要最小限の支援で1年間かけて主体的に研究を継続して研究レポートを作成させる事業（“ひょうご いえしま発”子ども海辺の環境リポーター事業 平成20～22年度 日本財団助成）を実施した（榎谷 2010 2011）を実践していた。「いえしま」を離れて数年がたち、筆者はこのような事業を再び実施したいと考えていた最中で、和田先生に「ひとはく」セミナーとして実施できないか、提案した。

ただし提案だけでは「そのうちやりましょう」で終わってしまうので、筆者が「ひとはく」に伺って過去の「いえしま」での実践について話をしたり、和田先生に「いえしま」に来てもらったり、またセミナーを手伝ってもらう予定の、先生が顧問を務める県立大学の学生団体「いきものずかん」の学生たちにも「いえしま」に来てもらったりして準備を進めた。

そうして平成29年度から、和田先生と筆者の2名を講師として、「いえしま」をフィールドとして「ひとはくサマースクール」を実施することとなった。

29年度の実践（セミナー）の概要

29年度実践については、すでに昨年度の「共生のひろば」で述べた（榎谷 2018）が、再掲する。

6/25（日）を第1回として計5日での実施予定であったが、この日は悪天候のため中止とした。そのため、計4日（1泊2日を含む）で実施した。指導スタッフは和田准教授と筆者、セミナー参加児童は8名（5年男児5名、5年女児1名、6年男児1名、6年女児1名）で、各回とも兵庫県立大学生・院生数名が参加し、指導補助及び安全確保を行った。また2日目と3日目には、島根大学 原口展子特任助教（海藻学）が指導スタッフとして加わり、女子児童の掌握も担当した。1～3日目は「いえしま」をフィールドとして実施し、4日目は「ひとはく」で実施した。活動の様子を図1に写真で示す。なお、研究対象生物の採集については予め許可を得た。

1日目（7/8（土））：研究に対する心構えや安全確保等に関するオリエンテーションを行った後、砂浜に出て、生物採集手段としての小型地曳網を実施した。その後、磯浜で箱眼鏡等を用いて生物観察や採集を行った。最後に、和田准教授と筆者がそれぞれの児童に面談し、各々が研究対象とする生物を決定した。

2日目（7/21（金））：生物観察手段としてのスノーケリングを実施した後、磯採集や釣り等、各自が自ら方法を決めて、研究対象とする生物を採集した。また希望する者は和田准教授とともに、1日目の小型地曳網で採集した魚類の同定及び計測を行った。夜には全員で砂浜、磯浜に出て集団で観察を行い、希望する者は夜の砂浜で指導スタッフ付き添いのもと生物の採集を実施した。この日はセンターのロッジに宿泊した。

3日目(7/22(土)) : 原口特任助教から海藻についての講義を受けた後、昨日に続いてそれぞれの活動を開始した。図鑑等を用いての生物の同定や、体長及び重量等のデータ測定、行動の観察等を行い、得られたデータ等をもとに指導スタッフと面談しながら研究のまとめ方を検討した。最後に研究成果を模造紙1枚程度のポスターにまとめて次回持参することを課した。なお、採集した生物は元の生息場所に返させた。

4日目(8/6(日)) : 各自家庭でまとめたポスターを指導スタッフの助言のもと加筆修正を行った後、発表練習を実施した。そして、指導スタッフや指導補助の大学院生、保護者を前にして、各児童が質疑応答を含めて15分程度のポスター発表を行い、セミナーを終えた。

筆者が、参加児童への事前・事後アンケートを環境教育的に分析したところ、実体験を通して児童の海の機能への認識がある程度広がったことや、環境に対する認知よりも「できる」「しないといけない」という行動評価が環境配慮行動に影響を及ぼすようになることが示唆された。

30年度の実践(セミナー)の概要

参加児童は全て男児で、5年生4名、6年生2名であった。6年生の2名は30年度も参加した者であった。

本年度も計5日での実施予定であったが、台風と集中豪雨に悩まされ、「いえしま」での実践は、6/24(日)のみで、小型地曳網での生物採集と、磯浜で箱眼鏡等を用いての生物観察や採集を行った。7月に実施予定であった肝心の「いえしま」での「研究活動」は実施できず、8/11(土)に「ひとはく」に集合し、6月の小型地曳網で採集し冷凍保存していた稚魚の同定と計測をするに留まった。



「いえしま」での集合写真 後列右端が和田先生、左端が筆者



左上：地曳網を引く児童たち

右上：地曳網で採集した生物の説明をする和田先生（中央奥）

下：魚類を解剖して見せる和田先生（右）

おわりに

29年度は和田先生も私も初めてということもあり、お互いにやや遠慮があったが、2年目となる30年度にはお互いに意見を言い合い、先生も筆者もはっきりと自分の意見を言う性格なので、場合によっては平行線をたどることもあった。先生は児童のポスター研究発表の際に、不勉強な大学生や大学院生を叱るかのように厳しい接し方をすることもあった。それが先生の仕事に対する熱心さの表れで、児童たちに「子ども」としてではなく「一人前の研究者」として接しているのだと理解しつつも、「小学生にバックグラウンドの勉強を求めるのは違いますよ」と意見を言ったこともあった。

昨年11月に和田先生が急遽、逝去された。「サマースクール」がたった2年で終わり、また30年度は悪天候のため十分な実践ができなかったことは、先生も残念に思っていたことと存じ、また筆者も無念であった。

しかし、たった2年間とはいえ、海洋生物学の専門家である先生と、里海の世界環境教育の実践者である筆者が共同で実践したこの「サマースクール」は参加児童及び保護者の満足度の高いセミナーであったと自負している。そして、お互いに意見をぶつけることのできる付き合いをさせていただき、共同で「サマースクール」の実践をできたことは、何事にも代えがたい経験であった。

体の不調を押し、「サマースクール」を実践してくださった和田先生に感謝申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

参考文献

- 1) 梶谷英樹, 2010. “ひょうご いえしま発” 子ども海辺の環境リポーター事業～海辺の環境学習の新しいモデルここに～. 平成 21 年度兵庫自治学会研究発表大会要旨集. 54-55
- 2) 梶谷英樹, 2011. “ひょうご いえしま発” 子ども海辺の環境リポーター事業～海辺の環境学習の新しいモデルここに～その2. 平成 22 年度兵庫自治学会研究発表大会要旨集. 24-25
- 3) 梶谷英樹, 2018. 子どもの主体性を尊重した「海の生きもの研究」への取組と効果～「いえしま」での実践から～. 共生のひろば (兵庫県立人と自然の博物館) , 13:91-94